

今月の聖句

『責めるべきことがあっても、

赦し合いなさい。』

コロサイの信徒への手紙

第3章 13節

◎6月の予定

2日(金) 校内研修会

6日(火) 内科検診

尿検査(二次)

9日(金) SAの集い

13日(火) 音楽会

16日(金) デイキャンプ(小) 3・4年

聖書教室

23日(金) デイキャンプ(小) 1・2年

教職員協議会

26日(月) 水泳教室(小) 27日

28日(水) 期末試験(中) 30日

30日(金) デイキャンプ(小) 5・6年

◎7月の予定

1日(土) 学校説明会

12日(水) 水泳訓練(小・中) 14日

18日(木) 時間割変更期間 21日

20日(木) 給食終了

21日(金) 一学期終業礼拝

24日(月) サマーキャンプ事前指導(中)

25日(火) サマーキャンプ(中)

春の遠足

5月9日、各学年遠足に行ってきました。
 小学校1・2年生は花菜カーテン、3・4年生は江の島、5・6年生は鎌倉へ。中学生は秦野方面に「歩く」遠足として、山登りをする一日になりました。



◎今月の行事から

○デイキャンプ(小学校)

小学校は2学年ずつに分かれてデイキャンプを行います。学齢によってプログラムは違いますが、海岸に出かけ、自然との触れ合いや野外炊事を体験するプログラムを準備中です。日頃から豊かな自然に囲まれたステパノ学園ですが、新たな発見を見つける良い機会となります。

○音楽会(6月13日)

3年ぶりに全校児童生徒が海見えるホールに集まって音楽会を行います。各学年、聖歌を1曲、自由曲を1曲、演奏や斉唱します。授業内だけでなく、各クラスでも練習時間を設け、練習に励んでいます。子どもたちのきれいな音色がホールに響き渡ることを楽しみにしてください。

○野外炊事(中学校)

7月のデイキャンプに向けて、家庭科の授業を中心に各学年、野外炊事の練習をしています。また、期末試験終了後は本番同様に3学年合同で野外炊事を行う予定です。一人ひとりに役割があり、全員の力が合わさって、一つのものを作り上げる姿はステパノ学園ならではの光景です。

コンプレックス

校長 佐藤 紀明

私達は容姿、性格、能力、家庭環境など人と比べてネガティブになるコンプレックス（劣等感）を持っています。足りないものや他人と比べて劣っている点を挙げたらキリがありません。コンプレックス（劣等感）とは、アルフレッド・アドラーという心理学者が、提唱したとされています。アドラーは著書で

「人間であるということは、

劣等感を持っているということだ」（アドラー）

と言っています。コンプレックス（劣等感）を持つているということは、自分自身に不足感を持っていると言えます。ここが足りないと感じることは、本当はこんな風になりたいというイメージがあるはずだと思うのです。

私達は、コンプレックスによって失われたことに目を向けがちです。でも、恵まれない境遇を嘆いたり、恨んだりするのではなく、コンプレックスがあるからこそ得られてきたものがあることに気づく必要があります。

問題に気づけないと、その問題はずっと、改善することはありません。コンプレックスを感じていることは、自分自身の問題に気づけている状態だと思うのです。だからコンプレックス＝劣等感と捉えるのではなく、コンプレックスは自己成長のためのツールとして、自身の『原動力』として考えたいです。

学生時代、授業中に一枚の紙を渡されて、「コンプレックスに感じることを全て書く」という授業がありました。自分でも驚くほど沢山書きましたが、周りの友人も同じように沢山書いてありました。コンプレックスとは、みんな同じように沢山持っているのだと感じました。紙に書くことで思考が整理されて、自分自身の内面を客観的に考えることができます。そして解決方法を考えていきますが、全てを改善する必要がないことに気づきます。自分が思うコンプレックスに、少し距離を置いてみると、コンプレックスに感じていることは、大切な『個性』かも知れないのです。

映画女優であるオードリー・ヘプバーンは、華奢すぎる自分の身体に、コンプレックスを抱いていました。戦時下の劣悪な食糧事情の中を生きなければならなかった少女時代に、摂食障害状態に陥り、その後も太れない体質になってしまったそうです。コンプレックスに正面から向き合い、生かす道を探しました。そして、彼女が作り出した新しい価値観は、やがて多くの人に受け入れられ、世界中から愛される大女優へと成長していったのです。

視点を少し変えるだけで、コンプレックスは大きな武器にもなります。コンプレックスに思っていることは、「他の人と違う」ということをネガティブに捉えているだけなのかも知れません。「他の人と違う」という部分は、考え方によっては自分自身にとって唯一無二の『個性』になりえると思います。

自分のコンプレックスを武器にして、多くの人から愛されている著名人は沢山います。人とは違う見た目を個性にしていたり、ふくよかな肉体をチャームリングに見せています。普通の人が持っていない特技で活躍する人もいれば、平凡であるということを逆に個性にしている人もいます。それぞれの『個性』は、作り出そうとして生み出せるものではありません。コンプレックスは、生まれ持った唯一無二の『個性』そのものなのかも知れません。

自分自身の『個性』を生かして、他の人には無い、生きていくための武器に変える。そんな強さと勇気があれば、コンプレックスはいつの間にか消えて、自分だけの『個性』が大きな『魅力』になってくれるはずです。

コンプレックスをどう捉えるかで、人生の幸福度は変わってくると思います。悩んでも解決しないコンプレックスであれば、いつそのことそれを生かす道を徹底的に考えてみるのも良いかも知れません。それは唯一無二の魅力的な『個性』になっていくと思います。

誰もが、コンプレックスを持っています。自信に満ち溢れているように見える人ほど、実は自分自身のコンプレックスを見つめ直し、正面から向き合っています。コンプレックスを知ることが、自分自身の弱さや強さなどの内面と出会うことに繋がっていきます。『凛』とした自信に満ちた自分になるために、勇気を出して、自分自身のコンプレックスに正面から向き合い『魅力』に変えていきたいです。

多様性が育む豊かな心

教諭 藤原 佳紀

ステパノ学園でご奉仕させていただくようになって二カ月が経ちました。新しい学校で、新鮮な気持ちで多くのことを学ばせて頂き、あつという間の二カ月でした。その中で私が感じたことをお伝えできればと思います。

まず、毎日のあいさつのすばらしさに感銘を受けました。目を合わせてくれて名前を呼んでくれる子もいて、心を温かくしてくれました。また、他者に対する寛容な気持ちや、いわゆる仲間外れのような異質な人を排除する雰囲気は全く感じないこともステパノの子の素敵などと感じました。

こうした子ども達の雰囲気は、以前私が勤務していた学校と似ているのですが、その学校の状態もステパノ学園と似ている点がありました。それは、多様性の中にあるということです。この「多様性」が子ども達の豊かな心を育んでいるのではないかと思います。

四、六年前になりますが、私はアメリカのシカゴ日本人学校に勤めていました。シカゴ日本人学校も、私立の小中の併設校であり、各学年の人数も二〇名前後の学校でした。そして、様々な「多様性」のある学校でもありました。

まず日本からアメリカへ転勤してこれらのご家庭が多いため、出身地が全国津々浦々で

した。はじめの自己紹介は「〇〇県から来ました。」が恒例で、さまざまな方言が聞こえてきたりもしました。四月と九月は毎年二十、三十人の子が転入・転出で入れ替わります。多様な地域の子がみんな度過す学校でした。小学四年生の社会科では、日本の都道府県の学習をしますが、「この県は、〇〇があるよ。」「こんな方言もあるよ。」とそれぞれが得意になって話し出し、大いに盛り上がりました。初めて知ることの楽しさ、バックグラウンドのちがう友達が多いことの楽しさを日常的に感じることもできる機会がありました。

次に、学校の多様性があります。アメリカの日本人学校が小規模な理由の一つに、現地校の存在があります。せっかく生きた英語にふれることができる環境があるので、アメリカの現地の学校に通わせるご家庭が少なくありません。はじめは日本人学校にいた子も一年後には「現地校にチャレンジしてみたい。」といった転校する場合もありました。帰国が近いので、日本の文化にふれさせたいと、日本人学校へ転入してくる場合もありました。小学三年生や四年生でも自分の進路を考えて学校を選んでいました。お互いの選択を尊重し、転校する子のために毎回、全校集会を開いて「エール」を送っていました。

このように、クラスメイトの入れ替わりが多い学校ではありましたが、友達同士はとも仲が良く、帰国した子と連絡を取っている方も多くいました。まさに一期一会(互いの多

様性を尊重し、一つひとつの出会いを大切にする)という言葉がぴったりに思えました。

ステパノ学園も、多様な個性のある子がいます。得意なことは人それぞれ、苦手なことも人それぞれ。そんなちがいのある子ども達だからこそ、どんな子にも平等に、どんな人にも優しく友好的にできる児童が多いのだと感じました。やはり、多様性のおかげで一期一会を楽しむ気持ちが育まれていることが大きな要因であるように感じました。

ステパノ学園の児童生徒の笑顔のおかげで、私も毎日とても幸せな気持ちにさせてもらっています。もちろん子ども達は、ときに争いやいさかいをおこすこともあると思います。そんなときには一期一会、多様性の貴重さを伝えていこうと思います。多様性の社会に笑顔いっぱい生き抜いていく子ども達を育てる者としてこれからもいきたいと思っています。

最後に、森信三さんという教育者の残した私の好きな言葉を紹介します。

「人は、一生のうちに会おうべき人と必ず出会える。それも、一瞬も早からず、一瞬も遅からず。」

私もステパノ学園で出会えてよかった子がたくさんいます。子ども達同士もそうした貴重な出会いとなり、大人になっても大切な思い出となる一期一会の場であってほしいと思います。



みんなが一所懸命、みんなで一所懸命

非常勤講師（書写） 山澄 智英

昨年の九月に書写を担当してから早いもので新年度も六月になりました。初めての磯町。自然豊かで文化遺産が多く、すぐに好きな町になりました。特に、海水浴場が開かれたことなどを記録した大磯駅前のロータリー内にある「海内第一避暑地の碑」が気に入っています。

私は、埼玉県の川口市で育ちました。川口市は、鑄物の町として栄え、吉永小百合さん主演の映画の舞台になりました。自宅からほど近い青木町公園には、最初の東京オリンピックのために川口で鑄造された聖火台の完成しなかった方が置かれています。市内で好きな場所の一つです。小学校からサッカーを始め、中学校・高校・大学でも続けました。放課後は早く部活動に行きたいので、友達と「掃除はすばやく終わらせよう。」「帰りの会の準備を急ごう。」と班やクラスに声をかけていたことが思い出されます。教師になつてからもクラスの生徒に「やりたいことや優先したいことがあれば、他のことは嫌々でなく集中して、時間をかけなくてすむことは短時間で。」と言い続けてきました。楽しいことを長く続け、周囲からの理解を得るためには、「このために、これがあるから頑張れる」という気持ちをもち、示すことが大切です。

休日にはスポーツをよく見えています。特にラグビーが好きで大きな影響を受けました。高校時代、三年間ラグビーの授業があり、英語でもよく言われる「ひとりは皆のために、

皆はひとりのために」という言葉を学びました。学校生活にもあてはめることができます。児童・生徒のみなさんはいつもそう思っている動すべきだと思います。すでに心がけている人もいるかもしれません。授業でも委員会活動でも部活動でも何でもそうです。「先輩の背中をみる、仲間に横顔で示せ。」、これもよく指導で使ってきた言葉です。たとえば、中学校三年生の授業中の姿を先輩のみなさんに見せることはできませんが、昨年度の三年生も現三年生も授業開始から終了まで、誰もがやるべきことの先を見ながら基本的な学習過程に沿って黙々と学習を進めます。全員がしっかりと同じ方向を向いていると言えるでしょう。最高学年であり、用具の扱いなども当然慣れているわけですが、ひとりの意識の高さがクラスのためになり、クラスがひとりのためになっています。

先日、小学校四年生の授業が終わるとすぐに、「先生、ごめんなさい。」と言いに来た人がいました。何のことかと聞くと、「文字が教材文字のようになりませんでした。」と言い、申し訳なさそうな顔をしていました。授業のまとめとして、ワークシートに硬筆で教材文字と振り返りを書かせていますが、自分の書いた文字が思い通りにならなかったそうです。

教科書の文字は「手本」といわず「教材文字」ということを覚えていたことがうれしく、自分の言葉の中にそれを使えたことはすばらしい、と伝えました。文字だけでなく、知識の部分も生活書字力には欠かせません。残念ながらすべての学年のことは書けませんが、昨年、悪字例を示し、なぜそうなるってしまうのかを考えさせたところ、複数の学年で私が予想しなかった説明を聞くことができました。他にも、字形の整え方、楷書の九つの点画の種類（基本点画）と行書の五つの特徴（書き方）の暗記、筆や鉛筆の正しい持ち方など、ステパノ学園のみんなが頑張っています。

日本が優勝したWBCの感動が残っている人は多いことでしょう。大会後、テレビで栗山監督が選手一人一人に手書きの手紙を送ったことなど数々のエピソードが紹介されました。テレビに映った丁寧に書かれた手紙の一部と受け取った選手の感想から、多くを得た気がします。IT機器により、様々なことが便利になりました。社会で文字を書く機会は少なくなりましたが、「だからもっと手書きを」という時代ではありません。必要なことは、プリンターでの印字、メールなどで手で文字を書くことを公私において使い分けることです。書写が目指していることは、相手意識をもち、ノート、手紙や葉書、役所への申請書、電話等のメモなど、自他ともに困らない読みやすい文字を書く土台づくりです。一つ一つ、一所懸命進んでいきましょう。

道のり

非常勤講師（社会） 中村 紀子

「将来は、先生になりたい」初めてそう思ったのはいつのことだったでしょうか。はっきり記憶にはありませんが、中学生の頃にはそう決めていたように思います。今はこうして夢をかなえています。スタートラインに立つまでは、なかなか厳しい道のりでした。

実は私は教員採用試験に三回失敗しています。試験に落ちる度に、全人格を否定されたような気がして落ち込み、社会人として活躍している友人達を見ては、自分の不甲斐なさに落ち込み、かなりつらい時期もありました。でも、子どもの頃からの夢をあきらめることはできませんでした。今度落ちたら本当にやめよう、そう思って臨んだ四回目の採用試験でようやく合格することができたのです。こうして同級生達から遅れること三年、私の教員生活は公立の中学校でスタートしました。

初任の中学校で五年を過ごした後、校長室に呼ばれて、初めての転勤先を告げられました。新しい学校の名前の後に思いがけない一言が。「支援級の担任をしてもらうから。」一瞬頭の中は、真っ白に。支援級なんて考えたこともありません。考える間もなく私の口からは、「なんで私がですか。」という言葉が出ていました。今から考えると傲慢で不遜な本当に恥ずかしい言葉です。しかしすでに決ま

ったことなので受け入れるしかありません。私は、かなり複雑な心境で、新しい学校に赴任しました。が、そこでの生活は今まで経験したことのない豊かで楽しい毎日でした。

教員が二人に助手員さんが一人、そして九人の子どもたち。少人数だからこそ、生徒一人一人との深い関わりや、ゆったりとした時間の流れ、穏やかな空気にすっかり魅せられてしまいました。支援教育のことを何も知らなかったので夏休みを利用して、講習を受け、養護学校教諭の免許を取りました。さらにもう少し深く学んでみたくなり、支援学校への転勤希望を出しました。

支援学校に来てまず驚いたことは、先生方が非常にポジティブな物の見方をすることでした。支援級にいた時は、通常級の生徒と比べてしまい、どうしてもできないことに目が向いてしまいます。そして、ついあれもできない、これもできないと、マイナスの評価をしていました。でも支援学校では違いました。肢体不自由部門にはとても重い障害を持った子ども達が通学してきます。その子ども達が日々の生活の中で見せるちょっとした反応、まばたきをしたとか、指先を動かしたとか、小さな反応を見逃さず、「すごいね、こんなこともできるんだね。」とプラスの評価をするのです。マイナスの評価から、プラスの評価へ、これは大きな違いだと思います。

最初の支援学校では、知的障害部門の、中学部と高等部、二校目では、肢体の小学部と

知的の小学部というように、小、中、高と様々な年齢の、様々な障害をもった子ども達と関わることができました。支援学校では、「将来子ども達が自立するためには、今何を身に付けることが大切か。」ということを念頭において教育が行われています。それは、教科の勉強だけでなく、友達と仲良くすることとか、ちよつと苦手だなと思うことでも我慢することとか、実に多岐に渡ります。毎日の生活すべてが勉強です。

小学校一年生から、高校三年生までの子ども達の教育に携わり、多くのことを学ぶことができました。さらに退職後、ご縁があつて幼稚園で働くことになりましたが、ここでも「就学前の幼児教育が、人間形成においていかに大切か。」ということをさらに学ぶことになりました。

こうして振り返ってみると、大学を卒業してから今日までの道のりは、想定外のことばかり。もし、あの時、校長先生のお話を、「どうしても無理です。」とお断りしていたら、まったく別の道を歩んでいたでしょう。

支援教育の道へ進んだため、最初の夢だった「社会の先生」からは、離れることになってしまいました。しかし長いブランクを経て、また思いがけず、「社会の先生」として教壇に立つ機会をいただけたことに、心から感謝しております。「遠い昔の忘れ物を取りにきたような。」そんな気持ちで楽しく、充実した日々を過ごしています。

「小学校」

五月九日は子ども達がまちに待っていた春の遠足でした。良い天気が与えられ、二学年ごとにそれぞれの場所へ出かけ、あっという間の楽しい時間を過ごして帰ってくるのができました。興奮冷めやらぬ子ども達の、思い出の言葉と作文をご紹介します。

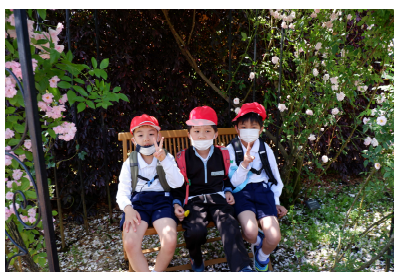
《1・2年生@花菜ガーデン》

「一番楽しかったことはなんですか？」

「(ひろばで) 1・2年みんなでどろけいをしたこと」(T・N)

「おべんとうがおいしかった。ピンクのお花がきれいだった」(S・T)

「五月九日に、一年生と花なガーデンに行きました。バラの花がとてもきれいでした。とても、いいにおいがしました。」(Y・K)



《3・4年生@江ノ島方面》



「5月9日に遠足に行きました。3・4年で行きました。東海道線から江ノ電に乗りかえました。遠足で電車は、はじめてでした。江ノ島に行くための橋は、長いので、一休みして、わたりました。江ノ島には、いろいろな店が、ありました。エスカレーターに乗りました。まるで水族館みたいでした。」

(H・Y)

「ぼくは遠足にいきました。江ノ島にいきました。りすを見つけて楽しかったです。ニホンリスだと思えます。(お弁当を)食べている時に、空にトンビもカラスもいました。ぼくのおべんとうをねらいにきたのかな。頭にぶつからないか心配でした。今度、みんなでもた行きたいな。」

(M・M)

「えのしまに三ねんせいと四ねんせいといっしょにえんそくにいきました。ママがつくったおべんとうがおいしかったです。」

(K・M)

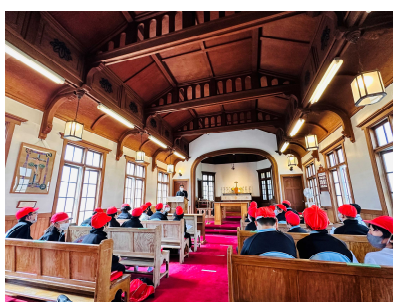
《5・6年生@鎌倉方面》

「今日は、遠足でかまくらに行きました。聖ミカエル教会でおいのりをしました。教会の中は、きれいでした。次は、げんじ山公園に行きました。お昼ごはんを食べました。おいしかったです。おやつも食べました。おいしかったです。班のみんなで食べました。とにかく楽しかったです。」

(T・I)

「ぼくは、今日、学校の春の遠足で、聖ミカエル教会と、その後に、げんじやま公園に行きました。れいはいをしたり、クイズをしたり、おべんとうや、おかしを食べたりしました。いろんな事ができて、とても楽しかったです。また行きたいです。」

(R・S)



「中学校」

気持ちの良い晴天の中、久しぶりに「歩く」遠足に行ってきました。学年を隔てた生徒同士との交流を深める良い遠足になりました。

「楽しかった遠足」

中学一年 T・T

5月9日は、ステパノ学園の遠足に行きました。電車に乗った時は、「山登りはいやだなあ。」と思っていました。電車に乗り終わったあとは、山につきました。でも登ってみると意外と楽しかったです。あと、景色もきれいでした。昼には弁当を食べました。つかれた後なので弁当がとてもおいしく感じました。帰り道では、急な坂を下りました。とても道が細くてすべるので不安でした。だけど先ばいが、「こゝ、あぶないよ。」と言ってくれて、とても助かって、かっこよかったです。ぼくもいつか、先ばいのようにになりたいです。来年の遠足が楽しみです。

「大切な役目」

中学二年 O・M



「不安だなあ。」

そんなことを考えていた遠足の前日。中二になり、先輩という立場での遠足は初めてで、中一のお手本になりながら中三のサポートをするという大切な役目を背負っているからか不安で仕方がなかった。そんな不安が積もって行く中、気がつけば遠足当日になった。連絡帳を出し、レリーフで出発するまでの

時間は何をすればいいのかわからず、ただ一人でじっと「先輩」という見えない名札に対して不安をずっと抱き続けるだけだった。

一年前の私は、こんな様々な感情を抱きながら遠足を待つことなんて考えてもいなかった。おそらく、また一年後はもっとすごい責任と不安と周りからの期待を背負い、行事を行うことになると感じた。

みんなの足が動き出して私は遅れないようにトコトコと付いて行く。駅員さんや、先生の話に対してあいさつや返事ができていなかった時に、班長さんや先輩たちがちゃんと注意をし、山の中ですれちがう人が来たら「はじに寄って。」と積極的に声を掛けてくれて、中一の子たちもあいさつ、返事ができていたし、声を掛け合っていたのは、先輩たちの積極的な声掛けのおかげだと私は感じている。班長さんはみんなとワイワイと話しながら班長としての仕事をこなしていて、「私も来年はこんな風にフレンドリーでちゃんとしている先輩になれるよう頑張ろう。」としみじみ思った。



果たして、私は先輩らしくできたか？私は先輩のサポートができたか？それは正直分からない。先輩に迷惑をかけたかもしれない。だが、私はこの遠足で後悔はしていない。

「初めての最高学年」

中学三年 O・H

初めてしおりを受け取った時、自分の所に班長の〇のマークが付いていた時は、二度見

をしてしまいました。三年生になって初めての遠足で、責任感を感じましたが、班で同じメンバーの皆が、班の目標や自己紹介などを率先してやってくれて、班長の自分もとても声掛けがしやすく安心してました。

遠足当日、電車の乗り継ぎや、何かと集まる度に人数確認をしたり、列を整えたりするのは矢張り凄く大変でした。副班長の友達が後ろから人数確認を手伝ってくれて、とても助かりました。

山道では、歩くのが大変な所が沢山ありました。班の皆も沢山歩いて大変だったと思いますが、ペースを落とさず歩いてくれて、良かったです。お昼ご飯の時間では、お母さんの作ってくれた非常に美味しい弁当を食べました。もうひと踏ん張りです。それから急な道で転んでしまう人が居たりと、かなり大変な道でしたが、皆が頑張って歩き続けてくれたお陰で、ようやく駅に着きました。普段は凄く疲れてしまうのですが、体力も付いたのか、以前より不思議と体が軽く、途中で止まったりせず歩いて嬉しかったです。

遠足が終わった後に、先生から、「中学校一年生たちが、日記に、班長がとても良かったと書いていたよ。」と言われて、頑張った良かったなあ、と心底思いました。



次回の野外での調理実習も、遠足での縦割り班で行うというのを聞き、また頑張ろうと思いました。遠足後に行ったHRでの後輩や、同学年の友達の見解を参考に、また次も頑張ろう！と思える素敵な遠足にする事が出来ました！



今春、四年振りに開催された保護者総会において、佐藤紀明校長のお話の中で、医師の日野原重明先生の「いのちの授業」が紹介されました。日野原先生は、本校と同じ聖公会の聖路加国際病院に長年お勤めになり、院長・名誉院長・名誉理事長を歴任され、一〇五歳で永眠される直前まで精力的に多くの活動に取り組まれました。七十五歳からは、小学校や豊学校に出向いて、十歳前後の子ども達との対話を大切に、「いのち」と「こころ」についての出張授業を重ねて来られました。授業では、先生はまず初めに、黒板の左端から右端にチョークで長い線を引き、右端に「一〇〇」、左端に「〇」、その少し右に「一〇」と子ども達の年齢を書き、ご自身の年齢も「九五」（授業当時）と書きます。そして、「今日は、『いのち』についてお話したいと思います」とみんなを見渡し、「いのち」とは何か、「生きている」とはどういうことか、いのちはどこにあるのか、と問いかけます。答えを考えながら、心臓の音を聞いてみるように促し、持参した聴診器を手渡します。子ども達は歓声を上げ、二人一組で相手の心音を聞きます。「見えないいのちが、形あるものとしてせまってくる瞬間を、ひとりひ

とりの感じ方で、うけとめ」る姿を見守り、更に九五歳の先生の心音とも聞き比べて、年齢によって一分間に心臓が打つ回数が異なることを説明します。心臓は、「酸素や水分や栄養物の入った血液を、全身に送りとどけるモーター」やポンプであり、その他の器官も、「いのちを保つのに、みな大切な役割を分担」していると考えます。それから再び「いのちは、どこにあるか」と尋ね、心臓、頭、全部と様々な意見を聞いた後、「わたしは、こんなふうと考えています」と前置きし、「いのちは、きみたちのもっている時間だといえますよ」と続けます。これから生きていく「その時間をみんなのいのちとして」、「自分以外のことのために、自分の時間を使う」心が大切だと説きます。また、「他人のいのちをも大切に」、「嫌いな相手をもゆるす」ことで平和の実現を次世代に託したいとの想いも語られます。「自立」とは、自分の時間の使い方を決められる大人になること、二十歳の頃に再び自分の時間・いのちをどのように使っているか考えてみてください、と結びます。

「あなたの希望を分かち合うために、あなたの時間を使うことが愛です」。私達保護者の活動も、このようにありたいと願います。



STEPHEN'S NEWS

飼育小屋近くの花壇に新しい花々が植えられました。上り坂の道沿いには、今年もアジサイが鮮やかに色づいています。



【編集後記】

楽しかった春の遠足に続き、中学校の中間試験も終わり、いよいよ音楽会が近づいてきました！

コロナの影響もひと段落し、学校中に歌声が響き渡るこの行事が戻ってきた!!と、わくわくしています。(え)

発行者 聖ステパノ学園小学校・中学校

校長 佐藤 紀明

ステパノだより編集委員会

〒255-0003

神奈川県中郡大磯町大磯868

TEL 0463-61-1298

FAX 0463-61-9739

<http://www.stephen-oiso.ed.jp>

二〇二三年六月九日（金）発行第277号